



谷川のひみつ

福田 隆浩

プロフィール

03年当會長編児童文学新人賞受賞作『この素晴らしき世界に生まれて』でデビュー。現在「赤毛の女医アン」シリーズを執筆中。長崎県在住。特別支援学校教諭。

満月がやさしい光をなげかけている夏の夜、僕は、ふるさとの谷川に帰ってきた。

僕がまだ小さかったころ、死んだ父さんは、よくこの谷川のことを話してくれた。

「ふしぎなどこなんだよな……」

そう言いながら父さんは、いつもニヤニヤ笑っていた。

どこがふしぎなのと、僕がいくらたずねても、

「いつか行ってみるんだな、満月の晩に……」

そう言うだけで、ほかにはなにも教えてくれなかった。

父さんは、自分のことをからかっているのだと思っていた。だからだろう。僕は、いつのまにかその話のことを忘れてしまっていた。

大人になり、僕はふるさとをはなれた。朝から晩まで仕事に追われるようになり、気がついた時には、あの時の父さんと同じ歳になっていた。

いつものように仕事を終え、つかれた体で電車でゆられていた僕は、どうしたことか、ふいにあの谷川の話の思い

出した。谷川に行ってみたいという気持ちが急にこみあげてきた。

ふるさとにむかう最終の列車が、むかいのホームにとまっているのが見えた。僕は、何かふしぎな力にひっぱられるように、その列車へとかけだしていた。

谷川にいった時は、もう夜ふけだった。空には満月がかんんでいた。僕は、川べにあった枝ぶりのいい山桜の木によじのぼった。

月明かりに照らされたなつかしい谷川は、川面にキラキラと月光をうつしていた。その流れは、幼子の寝息のように、やさしく、そして静かだった。

小さかったころの思い出やできごとが、次から次に僕の胸によみがえってきた。もう二十年以上もまえのことなのに、そのひとつひとつが、つい昨日のことに思えた。いつのまにか僕は、ネクタイをはずしていた。谷川の水音が、つかれきっていた僕の体に、やさしくしみわたっていった。